伊勢物語「芥川」段小考

竹村信治

1　はじめに

『伊勢物語』の「芥川」章段（第6段）は、高校古文の定番教材である。ただし、古来、議論が多い。

○「芥川」（物語部分）とはどこか？「内裏」（解説部分）との位置関係はどうなるのか？

①「大宮川」〈伝源経信『知顕集』等〉②摂津国三島郡の歌枕「芥川」〈牡丹花肖柏『肖聞抄』等〉③芥の捨てられた野に近い川〈清原宣賢『惟清抄』等〉④虚構の川〈契沖『勢語臆断』〉。

○「率て」（物語部分）？「負ひて」（解説部分）？

昔男は女を「率て」いったのか、「負ひて」いったのか（荷田春満『童子問』）。「率て」は歩いてか、女を馬に乗せてか。また、「弓・胡籙を負」う男（物語部分）は女を「負」うこと（解説部分）が可能か（竹岡正夫『伊勢物語全評釈―古注釈十一種集成』）。

○「かれは何ぞ」（物語部分）の女の言葉の真意は？そのように問う女がなぜ「いみじう泣く」（解説部分）のか？

「男にこゝろゆきてとらるゝほどにてはいかでか泣きはんべるなれども、業平にこゝろあはせたるといはんも無下に念もなければ、非道にとられたるやうにせんとて」か（伝源経信『知顕集』）。女の「心のまどへる」故か〈牡丹花肖柏『肖聞抄』〉、「夜深くかかる道なども見給へることなき」深窓の令嬢故か〈清原宣賢『惟清抄』・細川幽斎『闕疑抄』・北村季吟『拾穂抄』・契沖『勢語臆断』〉、「うち見たる時にふと思へる情」か〈藤井高尚『伊勢物語新釈』〉、それとも知っていてわざと聞いたのか。夜中に露は見えたのか、見えたのは稲光によってか〈賀茂真淵『古意』〉、月が出ていたのか、それとも松明の火の光か〈上田秋成『よしやあしや』〉。などがそれで、[1] 見られるとおり、古注、新注以来のものである。こうした議論は、右に書き込んでおいたように、本段を構成する物語部分（前半の昔語り的な「鬼一口」譚）と解説部分（物語部分を基経・国経による高子奪還エピソードとして語り直す後半）との間の懸隔や齟齬をどう扱うかという難題に端を発する。そして、見解の相違は、いささか乱暴な整理をこころみれば、

A両者のつじつま合わせを試みようとする立場

B後者を作者による種明かしとする立場

C後者を後人によるさかしら注記とみる立場

の三者の、いずれに立つかによって生じている。Aは伝源経信『知顕集』に代表される中世期の注に多く見られるもの。Bは一条兼良云「此一段は、皆物がたり書く人のつくりごとに書たるなり。」「此下の詞は、物語の作者のわれと尺したることなるべし。」(『愚見抄』)を経て契沖『勢語臆断』の

此作者みづから書てかく註して、まことにあらぬことをあらはせる歟。また業平の日記などにかゝれたるを、いまその作りていへることをあらはす歟。

にいたるもの。Cは荷田春満『童子問』(「伊勢物語をたすけて見るべき一案あり。それは本文と注者とを別に見る案也。」)や賀茂真淵『古意』(「此左の注には、末に順ぬしをさへ書出たれば〈第39段〉本文ならぬ事は明らけし。ぬりけすべきものなり。」)などで明確に打ち出される立場である。現在の議論も、これらの立場をそれぞれに引き継ぐかたちでさまざまに展開している。現行の教科書では、新注以来のCの立場、それを承けた日本古典集成『伊勢物語』[2]本段頭注、

「これは、二條の后の」以下は、例によって後人の注。この注に従うなら、本文の「芥川」を摂津の芥川と解するわけにいかなくなる。国経、基経が参内するために今の高槻市あたりを通ったことになり話が合わなくなるからである。だから「芥川」を宮中の小川とする説もあるが、そもそもは後人注が無理なのであって、それに従ってつじつまを合わせる必要はない。

などの見解にしたがってABの立場を斥け、さらに後半解説部分を省略した「鬼一口」譚のみを掲出する場合も見うけられる。

さて、こうした議論はしかし、物語部分だけを掲出する教科書の登場によって、逆に終止符がうたれたといってよさそうだ。「逆に」というのは、そのような処理が「鬼一口」譚のみの本章段の異質性を際だたせ、第6段という位置への再考をうながしたからである。本段は、解説部分を併せもってこそ『今昔物語集』巻第二十七(本朝付霊鬼)「在原業平中将女、被噉鬼語第七」とは異なる『伊勢物語』の一章段たりうる。また、その形であってこそ、第3段からの「二条后」章段群と第7段以降の「東下り」章段群との連接をになう第6段として、その位置づけの意義をもちうるのである。[3]つまり、Cの立場はありえない。

思うに、このありえないCの立場が有力でありつづけたのは、注釈、研究の場でたかまった原『伊勢物語』への関心にかかわり、いわば『伊勢物語』の成立論の範疇で、本段の有無、原初形態、形成過程が問われてきたことと無関係ではない。「「これは、二条の后の」以下を後人の書き加えたものとする説があるが、物語の正文と認むべきである。」[4]とした石田穣二氏は、

章段中のどの部分が古いか新しいか、あるいは、どの章段が古く、どの章段が新しいか、『伊勢物語』の成立を第一次と第二次に分ける、あるいは第一次、第二次、第三次と分ける、――そうなれば、これを何らかの形で、歴史的な時間軸の上に置くことになる。(…中略…)これは、今我々の目の前にある『伊勢物語』を、一応何らかの形に解体することである。いわゆる成立論は、解体に熱心でありすぎはしなかったか。その間に、物語自体を見失う結果になる恐れはなかったか。(…中略…)今見

る『伊勢物語』は、初冠の段にはじまり、終焉の段に終わる、業平の一代記の形を取っており、冒頭を「昔、男」「昔、男ありけり」という形でだいたい統一して、業平の一代記であることを朧化しようとしたと考えられる。『伊勢物語』が、全体として一つのまとまった物語として、つまり一つの作品として自己を主張しうる根拠は、まさにこの点にある。(…中略…) 作り物語を範型とする以外に、『伊勢物語』の成立はあり得なかった。つまり、今見る初冠本の成立した時が、とりも直さず『伊勢物語』の成立した時だったのである。不思議なことに、従来の論にはこの視点が欠落している。[5]

と述べている。以下、「成立」のとらえ方を石田氏にならい、物語部分と解説部分とを共にそなえた形を『伊勢物語』成立時の第6段の姿[6]とみなして、その表現内容および表現性をめぐる考察をこころみることとしたい。

2 「芥川」章段の表現内容

物語部分と解説部分とを共にそなえた第6段とは、なにを語る章段であったのか。

伝源経信『知顕集』第6段注には次のような記事がみえる。

この女を盗みかくしけること度々のこと也。あるとき、都のほかまでつれていで、茅が下葉にかくして、焼き出だされ(第12段)、あるときは、深草に家をつくり、秋の野をつくりて、萩・女郎花のなかに隠しおきなんどせしかども、またかりいだされなんどして(第123段?)、[7] いづくも、世はたゞ一つにて、かりもとむれば、隠れがたし。

これは、『伊勢物語』=「業平の一代記」の読書として、そこに散在する「女を盗みかくしける」章段を要約摘記したもの。それらが「業平の一代記」中の主要話題たる二条后(=「この女」)との悲恋物語の一文脈とみなされ、第6段もその一エピソードと解されているのである。

また、院政期の顕昭は、『古今集注』(『古今和歌集巻第十三恋歌三』)六四五・六四六番注の、69段を初段におく狩使本に『伊勢物語』の名義由来をもとめる説を批判した件りで、次のように記している。

又業平ハ二条后ノ間ノ事コソ始終ワリナキオモヒトミエ侍レ。始ニヌスミイダシテウバヒカヘサレ(6段)、又カクサレ(4段)、又カヨフミチヲフタガレ(5段)、後ニハ人ノクニヘツカハサレ(65段)ナドシタリ。

これも、「業平の一代記」としての『伊勢物語』の読書において、「業平」「二条后」悲恋物語を主要話題とみとめ、その中の一文脈を『知顕集』とは別の形で取り立てたものである。ここでは、「始ニ」「又」「又」「後ニハ」と恋の顛末がかたどられ、その間の「業平」の「始終ワリナキオモヒ」に焦点が当てられている。第6段はそうした業平の心的体験の「始」を語った話題というわけである。この「ワリナキオモヒ」は、『知顕集』でも、その摘出された一文脈に読みとられていたことであろう。

「盗みかくし」→「かりもとむれば、隠れがたし」→「ワリナキオモヒ」、「ヌスミイダシテウバヒカヘサレ」→「ワリナキオモヒ」。

第6段は、どちらの文脈に措かれるとしても、高子との叶わぬ恋を生きる業平の「ワリナキオモヒ」へと読者を導いていく。「かりもとむれば」「ウバヒカヘサレ」に明らかなように、そこで読まれていた第6段は解説部分をそなえた形であった。すなわち、物語部分と解説部分とを共にそなえた第6段は、こうして「業平の一代記」中の一話題、高子をその縁者に奪い返された業平の「ワリナキオモヒ」を語る物語として読まれていたのである。

ところで、物語部分と解説部分とを共にそなえた第6段の表現内容を古典時代の右のごとき読みにうかがうとして、しかし、そこには物語部分への言及がない。「かりもとむれば」「ウバヒカヘサレ」、その読書はあくまでも解説部分に軸足がおかれているのである。これは『伊勢物語』を「業平の一代記」とみなす読書の必然でもあろうが、そうした解説部分に即した読書が読者を業平の「ワリナキオモヒ」に導いていく回路は、業平への共感によるといえばいえなくはないけれども、なお判然としない。

このことを考える上で、時代は一挙に下るが、大和文華館蔵の伝俵屋宗達画「芥川図」や慶長十三年嵯峨本『伊勢物語』の第6段挿絵[8]は、一つのヒントを与えてくれるように思う。よく知られているとおり、それらの絵においては、男が女を背負って柳の葉が揺れる（芥川）河畔を行くさまが描かれている。そして、二人の視線はともに川縁の露に向けられている。女が男に背負われるのは解説部分で語られることであり、河畔に到って女が露を見とがめるのは物語部分で語られることである。描出された場面は二人の逃避行の時間。つまり、ここでは、二人の逃避行の時間が、解説部分と物語部分のそれぞれの叙述を縫り合わせる形で再構成されている。

いま「二人の逃避行の時間」と述べたが、この場面は、それが選ばれている理由を考えるならば、より厳密に、「白玉か」詠で男に回想された風景、つまりは記憶の中の女と共にあった時空間といわれるべきものであろう。「白玉か」詠は物語部分に昔男詠として語られることである。[9] ところがこれらの絵では、河畔で女が露を見とがめる構図に解説部分の〝高子を背負う業平〟を描き込むことで、物語部分の逃避行を業平と高子のこととし、「白玉か」歌を業平の詠とする。そうすることで、本章段を、「白玉か」と詠ずる業平の回想の時間、そこで業平によって反芻される記憶の中の甘美な情景において、（絵）語り直しているのである。

この絵語りの前提には、詠歌回想する男＝業平の心の内で経験された「ワリナキオモヒ」を想う読書があったはずだが、それは解説部分に軸足をおいて「ワリナキオモヒ」に想到した『知顕集』や『古今集注』にもあったことと推される。こうして、物語部分と解説部分とを共にそなえた第6段の表現内容は、古典時代の読みを介してこれをうかがえば、高子を「ヌスミイダシテウバヒカヘサレ」、「白玉か」歌を詠じつつ記憶の中の甘美な情景を反芻する業平の「ワリナキオモヒ」、ということになる。

3　語りの構造

さて、右のような表現内容は、歌に託された心情を主題化しその再現（リプレゼンテーション）にむけて叙述をつむぐ歌物語の本義にかない、ありうべきこ

とと観察されるが、このような表現がどのようにして成り立っているのか、すなわち語りの構造の問題を考えるとき、そこに喩のレトリックが指摘されることになる。「後半部分が実体を伝えるものであるとすると、前半部分のすべてはその比喩ということになる」と述べる渡辺泰宏氏論考（注1）や、前半部分を「仮相」、後半部分を「実相」とみなす片桐洋一氏の判断[10]はその例。河地修氏は「象徴」の語をもちいて次のように説明している。[11]

（物語部分ノ）この時の男の心情こそが、実はそのまま、二条后を奪い返された時の男の心情そのものであったに違いない。そして、六段は、その心情をこういう類型説話の形で表現してみせたものにほかならないと、私は思う。こういう形を取らざるを得なかったのであろうとも、私は思う。鬼が女を一口に喰う、すなわち、女の死は、そのまま、男と二条后との別れであろう。二条后は、二度と男のもとへは帰って来ない、そういう彼方の世界へと旅立ってしまったことの象徴であるであろう。そして、それと同時に、戦わずして敗れ去った男の姿は、そのまま、二条后を奪い返された時の、絶望的な、それは悲痛とすら言える男の無力感の象徴でもあるであろう。

「（二条后を奪い返された時の）絶望的な、それは悲痛とすら言える男の無力感」を「業平の『ワリナキオモヒ』」に置き換えれば明らかなように、右は古典時代の読書の延長線上にある。

「実体」の内側で経験された心的体験（「男の無力感」「ワリナキオモヒ」）の「象徴」としての物語部分。もっとも、喩の物語りの〝男〟と「実体」の掠奪者とが同一人物であることを重く見れば、この語りの構造はまた別の形で説明することができそうだ。

本章段後半の解説は、「これは」をもってはじまる。また以下には渡辺氏のいう「実体」が説かれる。そこには「それを、かく鬼とはいふなりけり」といった物語部分との対応関係を明示する文言も見えるが、注意されるのは、この解説部分が、出来事の枠組み（＝女性掠奪）を物語部分と等しくしながらも、両者の差異を際だたせることにむけて語られている点である。ここでいう差異とは、これまで「両者間の話題要素の懸隔や齟齬」と呼んできた事柄の数々である。このあまりに露わで明示的な懸隔齟齬は、それ故に逆に破綻とはみなしがたい。[12] むしろそれらは、物語部分の語りの位相を際だたせる仕掛けと見なすべきであろう。

拉致されて内裏近辺某所で泣きくれる高子を兄弟の基経・国経が取り返す「実体」解説。対する物語部分は、「からうして盗みいでて」の逃避行のさなか、「芥川」河畔で露を見咎めた女の「かれはなにぞ」の声を聞きながらも先を急いで答えず、雷雨の中、女を蔵の中に押し入れて戸口を守り「はや夜もあけなむと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。」女の「あなや」の声も耳に届かず、「やうやう夜も明けゆくに、見れば率て来し女もなし。足ずりをして泣けども、かひなし。」と語って、「白玉か」詠を添える。見られるとおり、懸隔齟齬は、出来事の外貌を「取りかへし」た側からなぞる語りと、出来事を当事者の体験に即して辿りなおす語りとの間で生じている。すなわち、物語部分は当事者側の語りとして、当事者に経験された心的体験に即した出来事の顛末をこそ語っているのである。そこでは、「盗み負ひて」の拉致逃亡は「率て行」く恋の

逃避行となり、参内経路上の某所は摂津「芥川」を過ぎた某地となり、「とどめて取りかへし」た基経・国経は「鬼」となる。また、女の泣き声は被掠奪者の愁嘆ではなく、掠奪者に救済を求める「あなや」の叫びともなる。

こうして、物語部分は「当事者側の語り」としてあるとおぼしい。したがって、物語部分と解説部分は「当事者側の語り」と「取りかえした側の語り」との関係にまずはあるのであって、「比喩」「象徴」と「実体」との関係にあるのではない。

ところで、物語部分に「当事者」性を嗅ぎ取るこのような感覚は、古典時代の読書にもあったもののごとく、『狭衣物語』(一)が『伊勢物語』を「在中将が恋の日記」と呼称するのもその一例だが、藤原定家は、『伊勢物語』を業平の自作とみなすか否かの議論にかかわって次のように述べている(いわゆる根源本奥書。引用は冷泉時雨亭叢書41『伊勢物語下』〈建仁二年奥書〉によった)。

抑伊勢物語根源、古人説々不同。或云、在原中将自記也。因茲有其嫌退比興之詞等。(…中略…)或心中秘密、身上興言、外人推而難記。以之思之、尤可謂其自書。(以下略)

「嫌退比興之詞」、「外人」の推して記しがたい「心中秘密、身上興言」の存在が「在原中将自記」の根拠だという。第6段物語部分はまさにその「心中秘密、身上興言」の事例。定家によれば、それは「当事者側の語り」ならぬ「自己語り」=「当事者の語り」ということになる。

もちろん、定家が右の引用に続けて「但、万葉古風之中、多載撰集之歌。仁和(光孝帝884~887在位=業平没後)聖日之間、粗記臨幸之儀(114段)。依此等事、又有此難。」と述べているように、すべてが真正の自己語りというわけにはいかない。したがって、『伊勢物語』諸章段は、『伊勢物語』成立時点で、真正のそれに創作(偽作)のそれを併せたものとするほかはない。しかも、第40段末尾「昔の若人は、さる好けるもの思ひをなむしける。今の翁、まさにしなむや。」によれば、自己語りは、「翁」たる業平自身が「けり」使用によって伝承譚化を謀ったもの。[13] すなわち、「心中秘密、身上興言」を他者のことば(伝承譚)に仕立てた「嫌退比興之詞」、いわば業平「韜晦」の自己語りとして整形、呈示されたもののごとくなのである。[14] 「当事者側の語り」となる所以だが、第6段の物語部分=「当事者側の語り」もそうした位相にある自己語りと見なすべきものであろう。[15]

物語部分をこのように考えるとして、では解説部分はどうだろう。これも〝業平韜晦の自己語り〟とみなせば、先に引いた契沖『勢語臆断』の説の前半(「此作者みづから書てかく註して、まことにあらぬことをあらはせる歟。」)に近づくことになるが、『伊勢物語』諸章段の解説部分は後人注記を思わせるほどに物語部分との位相差をもつ。また、真淵の『古意』が不審を表明したように、第39段では源順の名が記され、物語部分と解説部分との語りの時間差を明示してもいる。解説部分には元来のそれを模した後人追記もあって、その真贋の見極めがむずかしいのだが、[16] 追記の営みの前提にこの位相差の看取があったと考えれば、やはり解説部分は業平とは別の語り手によるものとしておくのが順当だろう。[17] が、それは契沖のいう「業平の日記などにか、れたるを、いまその作りていへることをあらはす歟。」とは異なり、見たように、業平の自己語りの語りの位相を際だて、そ

の「韜晦」の内側を、すなわち業平の心的体験を顕在化させるべく解説したもの。自己語りに創作（偽作）が含まれる点を考慮して言い直せば、業平の真正自己語り（「業平の日記など」）の「韜晦」に潜められた心的体験を汲み取り、また、その読書の地平で新たな自己語りを創作（偽作）して加え、それらをそのまま呈示したり解説したりして自己語りを次なる読者へと媒介する、そうした読者＝語り手によってものされたものである。『伊勢物語』はこの媒介する語り手の生成をもって成立したとおぼしい。

こうした語り手の存在を解説部分に見透かすとき、第6段は、また『伊勢物語』は、「〝業平韜晦の自己語り〟を聞き伝え語り伝える語り」、折口信夫流にいえば「〝翁の語り〟をもどく語り」[18]として我々の前にあると評することができそうである。本章段の読者は、この語りの構造＝〝翁のもどき役〟の〝もどきの語り〟に促されて、〝業平韜晦の自己語り〟を辿りなおし、「実体」の内側で経験された当事者の心的体験と出会う。「芥川図」等の第6段絵の絵語りの構図は、そのようにして出会われた業平の心的体験を「白玉か」詠に焦点を合わせつつ表象したものというべく、『知顕集』『古今集注』の（業平ノ）「ワリナキオモヒ」も、また河地氏の「男の無力感」も、同様にして発見されたものであろう。第6段はそうした読書を解説部分の〝もどき〟をもって読者にうながすテキストとしてあった。

4　自己語りの表現性

第6段の表現内容、語りの構造を以上のように考えるとして、次に問題になるのは、第6段の言述（＝生成の言語過程）の様態をめぐる議論、つまりは表現性への問いである。その批評にはさまざまな視点がありうるが、[19]ここでは先に引いた河地氏の発言にも指摘されている、業平の心的体験＝「ワリナキオモヒ」を表象する物語部分の類型性に即して考えてみたい。[20]また、その類型性をどこに認めるかについてもいくつかの判断がありうるが（たとえば「鬼一口」譚）、ここでは「女性掠奪」のモティーフに注目する。そこからは〝業平韜晦の自己語り〟、解説部分の〝もどきの語り〟についての別の位相もみえてくるようである。

ところで、物語部分に認められる「女性掠奪」の物語モティーフは、これを中古の文芸テキストに求めるとき、『源氏物語』の夕顔のように女が掠奪に合意している場合[21]（Ⅰ）、『大和物語』154段の女のように終始拒絶している場合（Ⅱ）、『大和物語』155段の「安積山」伝説の女のように掠奪されて後やがて男を受け入れていく場合（Ⅲ）の三類型がある。第6段の場合はⅢ型ということになる。しかし、これは『伊勢物語』諸本のうち、いわゆる定家本系統の本文（天福本・武田本・根源本、冒頭「からうしてぬすみいて、」）による場合のことであって、「女こゝろ（を）あはせてぬすみいて、」（広本系統）「をんなのこゝろあはせてぬすみて」（塗籠本系統）とする本文の場合にはⅠ型となる。後者は折口信夫に「文章が落ちてくる」と難じられた本文だが、[22]屋代弘賢『参考伊勢物語』所引の「黄門卿（定家）の手をへざる本」（中院（為家）大納言書写本）にもこの本文が認められる。また、山田清市氏が「藤原顕昭本」とした国立歴史民俗博物館蔵（大島雅太郎旧蔵）伝為氏筆本の「第一部原体本文」[23]も、顕昭『古

今集注』（古今和歌集巻第十三恋歌三）六三二番注に所引の本文も同様である。顕昭が『古今集注』の各処で「普通伊勢物語」「普通（ノ）本」／「普通ナラヌ本」「或本」の峻別を云々するなか、[24]そこに特段の言及がないところからして、「女（の）こゝろ（を）あはせてぬすみいて、」（折口信夫訳「女の心を、自分の心と一つにして」「女の心を合わさして」）[25]は、定家改訂以前の本文としてよいであろう。[26]

定家本系統の本文で読み慣れた目には違和感のある文言だが、この方が芥川河畔で女が「かれはなにぞ」と問う展開と整合する。そして、女を喪くした男の「ワリナキオモヒ」もつよく響く。また、定家本系統以外の広本系、塗籠本、小式部内侍本、真名本、「中院（為家）大納言書写本」によれば、定家改訂以前の『伊勢物語』では第6段につづく位置に次のような章段があったらしい（顕昭『袖中抄』（再撰本）第十「ノナカノシミズ」条に所引の本文で引用する）。[27]

考伊勢物語云、昔、男、女ヲヌスミテユク道ニ、水アル所ニテ、男、「ノマムトヤ思」ト、フニ、ウナヅケバ、手ニムスビテノマス。サテヰテノボリニケリ。男ハカナクナリニケレバ、本ノ所ヘカヘリ行ニ、彼水ノミシ所ニテ

オホハラヤセガヰノミヅヲムスビアゲテアクヤト、ヒシヒトハイヅラハ

逃避行のさなかの男女の宥和は第6段に通じ、こちらは男の亡くなったあとの女の詠だが、そこで回顧される記憶の中の情景は、これも第6段に通じている。本章段も、明記されてはいないが女合意の掠奪譚だろう。[28]このような話題連続も、「女（の）こゝろ（を）あわせて」が第6段の本来の本文であったことを示唆する。[29]

かくして第6段の韜晦の自己語りは、「からうして女（の）こゝろ（を）あはせてぬすみいて、」の掠奪とその不首尾を語る話題として、掠奪譚Ⅰ型を襲うものだったと目されるが、[30]第6段の言述の様態を批評としようとするここでの議論では、かかる掠奪譚が語られていること自体の意義が問われなければならない。これを考える上で、『古事記』下巻・仁徳天皇条の速総別王・女鳥王譚は一つの視点を提供していて興味深い。本話は、仁徳帝の庶妹女鳥王求愛の媒として派遣された速総別王（仁徳弟）が、求愛を拒否する女鳥王の「吾は汝命の妻と為らむ」との言葉にしたがって嫁いだ話題。女鳥王は速総別王に反逆をうながし、これを知った帝が軍を派遣、二人は逃避行のはてに討伐される。話題中、逃避行のさなかで詠まれる速総別王の「梯立の倉椅山を嶮しみと岩懸きかねて我が手取らすも」「梯立の倉椅山は嶮しけど妹と登れば嶮しくもあらず」歌が名高い。これらの歌を軸によめば、本話題は、速総別王が女鳥王の合意を得ての掠奪の後に逃亡を企てたものの不首尾におわり、女鳥王とともに果てた物語であって、Ⅰ型掠奪譚の先蹤と称しうるものであろう。もっとも、速総別王詠二首は歌垣に出自をもつと見られ、本話題自体、両首とⅠ型掠奪譚とをもって創作されたものと考えられる。つまり、Ⅰ型掠奪譚の先蹤は速総別王・女鳥王譚をさらに遡るという次第だが、第6段の〝業平韜晦の自己語り〟は、このような上代以来の物語モティーフに連接しつつ語られている。

『伊勢物語』と上代伝承モティーフとの相関。[31]興味深いのはそればかりではない。記紀説話における恋愛や結婚の多くが政治的な事象の喩として語られていることは周知のことに属するが、この速総別

王・女鳥王譚も、単なる恋愛哀話としてあるのではなく、皇位継承（王権）争いの政治的文脈を背景にもつ。すなわち、仁徳帝が王権保持のために弟速総別王を排除した出来事を、帝の求愛者（王の女）の掠奪者、反逆者（王権の侵犯者）が討伐された物語として語っているのである。同様の構図は、『源氏物語』の光源氏須磨流謫因縁譚（朧月夜尚侍との密会）にも認められるが、記紀説話にもいくつか見出だされる。もっとも分かりやすいのは『日本書紀』履中前紀、「矢代宿祢が女黒媛」をめぐる住吉仲皇子の話題であろう。そこでは、『古事記』下巻履中天皇条に「本、難波宮に坐しし時に、大嘗に坐して、豊明を為し時に、大御酒にうらげて大御寝しき。爾くして、其の弟墨江中王、天皇を取らむと欲ひて、火を大殿に著けき」[32]とある出来事が、住吉仲皇子による履中の后がね黒媛の掠奪（「太子の名を冒して、黒媛に奸（たは）く。」「爰に仲皇子、事有らむことを畏りて、太子を殺せまつらむとし、密に兵を興して、太子の宮を囲む。」[33]）と語られている。後、住吉仲皇子（墨江中王）は履中によって討たれるが、この歴史叙述においても、王の后がね（王の女）の掠奪（「奸（おか）し」）は王権侵犯の喩としてあり、掠奪者の討伐は王権侵犯者の処罰の意味をになう。

このようにして、速総別王・女鳥王譚は、履中前紀条あるいは光源氏須磨流謫譚などと併せ考えるならば、政治的事象を（王の女）掠奪・討伐譚をもって語る物語類型の一ヴァージョンとしてあったものということができる。そして、履中・住吉仲皇子譚が、女の合意なき掠奪者の討伐譚として、政治的対立者排除の正当化、王権の聖性担保にむけた王権の側からの語りであるのと比べるならば、これは、女合意の掠奪譚として、『源氏物語』同様、排除される「当事者」速総別王に眼差しをむけ、その心情（「ワリナキオモヒ」）への共鳴共感を誘うかたちで語られている。そのことは速総別王詠の存在と内容に明らかだろう。すなわち、前者を〝王権の語り〟と呼ぶとすれば、後者は〝敗者への共感の語り〟とでも称すべきものであって、これが速総別王・女鳥王譚、さらには上代伝承世界のI型掠奪譚の位相でもある。『伊勢物語』第6段の物語部分、自己の心的体験（「ワリナキオモヒ」）を他者のそれとして語る〝業平韜晦の自己語り〟はこのI型掠奪譚をもってなる（「白玉か」詠も速総別王詠と同趣）。それは、語るべき心的体験を〝敗者への共感の語り〟に表象される心情との相同性においてとらえ、そこに表現の場、言表のかたちを見出だしていく言述のあり様をうかがわせる。〝業平韜晦の自己語り〟の表現性はこの言述のあり様において批評されることになろう。

5　おわりに―第6段の表現性

さて、右は、第6段の物語部分の類型性に着目してその言述の様態、表現性をうかがったものだが、こうした考察は、おのずから自己語り自体の喩性＝虚構性を考えさせることになる。見たとおり、自己語りは「ワリナキオモヒ」を喩で語ったものであって、「実体」の「比喩」でも、先に述べたようなもう一つの「実体」（＝当事者にとっての「実体」）でもない。したがって、自己語りは「実体」とかかわらず、「ワリナキオモヒ」の由来もそこには明かされていない。おそらくはその欠を補おうとしたのが解説なのだろう。自己語りと読者との媒介役をになう語り手は、自己語りに潜められた心的体験へ

の理解を読者に導くべく、その由来（「実体」）を語るのである。

注目されるのは、しかしこの由来もまた類型的であることである。業平は高子を合意なきままに「盗みて負ひて」出る。そして「いみじう泣く」高子を基経・国経が「とどめて取りかへ」す。高子を摂関王権に属する女とみれば、掠奪した業平はその侵犯者。また、掠奪侵犯者の手から高子を奪還して威信を回復した基経・国経は、摂関王権の表徴でもある（古注では『知顕集』以来国経・基経兄弟の記載順が問題にされ、「昭宣公は弟なれども忠仁公の御養子なれば先に書くなり。」〈幽斎『闕疑抄』〉などと解しているが、これもこの表徴性にかかわっていよう）。すなわち、喩の語りの由来は、こうして「女性掠奪」譚類型の一つ、「取りかへし」た側からの語りとして語られるのであり、それは前節にみた履中・住吉仲皇子譚の〝王権の語り〟と類同する。それは、おそらくは、翁の喩の語りに上代伝承世界の物語類型を想起した〝翁のもどき役〟の仕業であって、彼はこの物語類型がになう政治的意味を顕在化させるべく、〝敗者への共感の語り〟と対をなす〝王権の語り〟によって「ワリナキオモヒ」の由来をもどいてみせたものであろう。その意味で、この類同は、語られる由来もまた「実体」でなく喩としてあったことを考えさせることになる。

語り手は、「ワリナキオモヒ」の由来を〝王権の語り〟をもって語ることで、自己語りに政治的文脈を含意させていく。それは「ワリナキオモヒ」にも政治的色合いを与えていくことになるが、そうしたかたちの政治性は『伊勢物語』の各処に見出されることである。舞台を「春日の里」として藤原氏との関連を匂わせる初段「初冠」で、その地の「女はらから」への呼びかけを「いちはやきみやび」とする語り手の評もその一つだろう。また、藤原常行への好意を語って応天門の変で排除されるその父良相への業平の同情を含意させた第77・78段[34]あるいは惟喬親王諸譚も、話題呈示にこれを滲ませている。これをもっていえば、第6段は、〝王権の語り〟のもどきによる政治的文脈の付与を得て、『伊勢物語』章段となったといってよい。

以上、『伊勢物語』芥川段の表現内容と表現性について若干の考察を試みた。第6段の語り手は、自己語りする業平に住吉仲皇子、速総別王らと同様の政治的敗者の姿をみとめ、その読書（レクチュール）にしたがって〝もどきの語り〟を構成する。そして読者は、この〝もどきの語り〟にみちびかれて〝（摂関）王権の語り〟を「実体」と見なし、これとの懸隔離齬をもつ自己語り（〝敗者の語り〟）をも実体化して、高子を奪い返され「白玉か」詠に記憶の中の甘美な情景を反芻回顧する業平に摂関体制確立期の政治的敗者の姿をも重ね、業平の「ワリナキオモヒ」に共鳴共感する。こうしてみると、本章段の表現は、この、〝自己語り〟と読者とを媒介する語り手の〝もどきの語り〟において成立し、表現性はこの〝もどきの語り〟のあり様、そこでの言述の様態、読者への作用のうちに顕現しているといえそうだ。

「〝自己語り〟を聞き伝え語り伝える語り」、「〝翁の語り〟のもどきの語り」としてある『伊勢物語』。したがって、右は第6段だけでなく『伊勢物語』の諸章段にもいえることであろうが、〝韜晦の自己語り〟が『伊勢集』『一条摂政御集』、また『土佐日記』にも見出だされ、〝翁（嫗）の語り〟が上代諸伝承の系譜を引き『源氏物語』等の作り物語にも引き継がれていること、〝もどきの語り〟もそこで草子地として手法化されていくことを考えれば、『伊勢物語』の表

現内容、言述の位相（＝表現性）はそれらをも参照しそれらとの比較において探られる必要があろう。本稿はそうした考察にむけた瀬踏みとしてある。

注1　ほかにも以下の点が問題にされている。
○「からうして」か「からうじて」か？
○「鬼あるところ」（物語部分）はどこか？
○「あばらなる倉」とは？
○「弓・胡？」を男はなぜ負っていたのか？
それらの一々が現在どのように論じられているかは、竹岡正夫『伊勢物語全評釈―古注釈十一種集成』（右文書院、1987刊）や渡辺泰宏「伊勢物語「芥川」―その形成と構造」、室城秀之「伊勢物語「芥川」（六段）―教材論として」（ともに『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ―古典編①』右文書院、2003刊、所収）などを参照されたい。なお、本稿での古注・新注の引用は、特にことわらない限り竹岡氏著書に拠った。

2　日本古典集成『伊勢物語』（渡辺実校注、新潮社1976刊）。

3　石田穣二『新版　伊勢物語』（角川文庫、1979刊）「解説」、二七一頁。

4　注3上掲書、一一二頁。

5　注3上掲書、二七六～二七七頁。

6　注3上掲書二八八～二九一頁、参照。なお、そこに紹介される大津有一、池田亀鑑両博士比定の第一次伊勢物語＝「現存諸本に共通すると見られるほぼ百段前後の『伊勢物語』」は、1～6・8～25・27～31・33・35～38・40～45・47～54・56～65・69・71～76・78～93・95～100・102～114・121～125の百五段をもってなるものとされる（池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究〔研究篇〕』有精堂　1960刊〈初版＝大岡山書店　1934刊〉、七八三～七九九頁）。なお、片桐洋一氏は、第6段を第三次成立章段としている。

7　第123段の深草女を、『彰考館文庫本伊勢物語抄』（片桐洋一『伊勢物語の研究―資料編』明治書院、1969刊、所収）は「順子」とし、冷泉家流系統の注釈を含む徳江元正氏蔵『伊勢物語註』（三弥井書店、1987刊）では「高子」のこととする。

8　和泉書院影印叢刊27、1981刊。荷田春満『童子問』には「ゐて行ける事　童子問、此条を絵にかけるに、男の女をおひて行さまをかけり。しかるに疑抄には「ゐて行」はひきいて行也とあれば本文負て行にはあらざるべし。疑抄にしたがふべしや。絵にしたがふべきや。」と見える。

9　「白玉か」詠は、紀貫之『新撰和歌』（四・恋雑百六十首第百五十九番＝恋歌）、『新古今集』（巻第八・哀傷・八五一番・題しらず・業平朝臣）の二作品にのみの所見で、出所不明歌。『新古今集』「哀傷」への入集は『伊勢物語』物語部分による。なお、荷田春満云「此哥なり平の口風に似ず、物語の作者の哥にて、なり平の哥と見えず、すべて此物語の哥、古哥を引直し、或は詞に合せて作者のよめる哥あまたあり。」（『童子問』）、賀茂真淵云「白玉てふ語、一首にはかなへど、前の文によくかなはず侍るを思へば、かゝる古歌の有しをとりて詞をつくりたるにも侍

るべし。此文大かたはさる例なれば也」（『古意』）、折口信夫云「この歌、切り離して考えると、女の歌だ。女の媚態を感ずる。」（全集・ノート編・第13巻・六段・注20）とある。

10 鑑賞日本古典文学5『伊勢物語・大和物語』解説（角川書店 1975刊。二〇頁）など。

11 『伊勢物語論集―成立論・作品論―』（竹林舎 2003刊）六三頁。

12 同様の指摘は関根賢司『伊勢物語論』（桜楓社 2005刊、二二一頁）に見える（初出「〈読む〉『伊勢物語』第六段」『日本文学』一九八九・一一）。

13 片桐洋一氏は、この第40段の末尾文について、次のように指摘している（注10、一八頁）。

「今の翁」がみずからの「若人」たりしときのふるまいを回想しつつ老いを歎くという形でこの物語が作られていたからこそ、このような表現がなされえたのだと思う。その意味において、『伊勢物語』の本質を、若年の成年式に臨んでみずからの経験を語り聞かせる翁の回想述懐の態度と成年成女を前にしての翁の対立意識の融合としてとらえようとされた折口信夫博士のすぐれた直感（『古代研究・民俗学篇』その他）に深い敬意を表さざるを得ないのである。

14 そこには業平が伝聞した他者の話題も加えられたことであろう。なお、中野方子「『古今集』業平の贈答歌と戯作詩」（第二十五回和漢比較文学会〔平成18年9月24日午後〕発表要旨）には、『古今集』恋五（七八四・七八五）の贈答歌（＝『伊勢物語』第19段）の業平歌における虚構性、戯作性への言及が見え、これと「『人』ならぬもの」に自らを擬す陶淵明「閑情賦」、白居易「代鶴」「問鶴」「代鶴答」、道真「問秋月」「代月答」などとの関連が指摘されている。〝韜晦の自己語り〟の生成、伝聞他者話題の混在も、これらを視野に入れて考えていくべき課題であろう。

15 片桐洋一氏は次のように指摘している（注10、22頁）。

第一次・第二次の『勢語』においては、韜晦した姿勢をとることはあっても、やはり当事者的表現になっていたが、第三次のそれになると、享受者の立場と同じ次元において創作活動に参画しているというわけである。

本稿では『伊勢物語』諸章段を物語部分と解説部分とからなると考え（前者のみの場合もある）、前者に「韜晦」の「当事者的表現」を認める立場をとっている。

16 このほか、物語部分と解説部分との見極めが難しい章段もある。たとえば初段の場合、末尾の「昔人は」以下をも含めた全体を〝業平韜晦の自己語り〟と考えることもできるが、他方、顕昭が『古今集注』（「古今和歌集巻第十四恋歌四」）七二四番注で、源融詠（「みちのくの」歌）をめぐって、

今考、川原左大臣融者、嵯峨天皇第十三子也。弘仁十四年生、寛平七年八月廿五日薨、年七十三。業平ハ天長二年生、元慶四年五月廿八日卒、年五十六。然者、大臣ノ年、増業平纔二年也。而伊勢物語、為業平作者、何以彼大臣作歌之心、詠和歌之由、注載乎。両歌前後、不審也。但如此注者、後人追々

注之。

と述べたように、「みちのくの」歌以下を解説部分とみなすことも可能である。こうした不分明さは、『伊勢物語』の語りの構造が物語部分を紹介しつつ解説する〝もどきの語り〟としてある故の必然でもあろう（後述）。

17 注12の関根論は、これを「草子地」ととらえる。本稿では、「草子地」として手法化される以前の、説話の話末評（注18折口論にいう「もどき」）に近いものと考えている。

18 「翁の発生」（新訂全集第二巻、中央公論社　1965刊、四一三頁）。「もどき」について折口は「もどくと言ふ動詞は、反対する・逆に出る・批難するなど言ふ用語例ばかり持つもの、様に考へられます。併し古くは、もつと広いもの、様です。尠くとも、演芸史の上では、物まねする・説明する・代つて再説する・説き和げるなど言ふ義が、加はつて居る事が明らかです。」と解説している（同上、四〇九頁）。

19 たとえば、注11として引いた河地氏の論など。

20 この類型的な話題が真正の自己語り（「業平の日記など」）にあったものか創作にかかるものかは明らかでない。注9に引いた『童子問』『古意』の発言に加え、折口信夫もそこで、

歌が、できた事情の忘れられたものが行なわれていて、一方には、女をつれて逃げたというような話はたくさんあるのだから、双方歩み寄って、こうなってきたのだ。そして、しだいに妥当性をもってきたのだ。一人の力で、こうぴたりとはいかない。うまくいってはいるが、しかしまだ詞書とこの歌とは離れている。

と述べている。一方、池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究〔研究篇〕』は、「白玉か」歌が紀貫之『新撰和歌』に所見の故をもって『伊勢物語』にあったものとしている（七六一～七六二頁）。『新撰和歌』は詠者名不記載が原形だが、『古今集』入集業平歌と重なる八首のすべてが『伊勢物語』掲載歌であること（『古今集』入集業平歌は三十首）、『古今集』非入集の『伊勢物語』歌として「白玉か」歌のほかにもう一首「くれがたき」歌（第45段）が元禄八年刊本巻二・一四五番（日本歌学大系別巻6）に認められることから、業平没時十歳前後であった貫之が、土佐赴任中、『古今集』以外に業平の歌集もしくは「業平の日記など」を所持していた可能性は捨てきれない。また、「白玉か」歌が恋歌として扱われている点からは、すでに第6段物語部分が〝業平韜晦の自己語り〟として形成され、歌集、「業平の日記など」に収載されていたとも考えられる。ただし、真正・創作のいずれの場合も、心的体験がこの類型的な話型をかりて表象されようとしている点、変わりがない。

21 『源氏物語』夕顔巻「物の怪、夕顔の女を取り殺す」の条で、光源氏は、夕顔を常夏の女かと疑い頭中将の奪還を懸念して、夕顔を二条院に移そうとする。そこでの夕顔は「女もいみじくなびきてさもありぬべく思ひたり」と、光源氏の誘いに合意している。後、夕顔は「なにがしの院」に連れだされ、そこで霊に取り殺されるが、その展開はここでとりあげる話型に対応している（注29参照）。なお、女の合意を得ての掠奪譚には『更

級日記』竹芝寺条や『古事記』上巻・大国主神と須勢理姫の結婚条もあるが、これらは不首尾の要素を欠く。

22 注9所引全集・ノート編・第13巻・六段・注6。

23 『伊勢物語校本と研究』桜楓社、1977刊。

24 古今和歌集巻第十一恋一・四七六番注、同巻第十三恋歌三・六四五・六四六番注、同巻第十四恋歌四・七四六番注、同巻十七雑上・九〇五・九〇六番注。なお、四七六番注では、尊経閣文庫蔵『在中将集』22～24と同じ三首を含む『伊勢物語』（第99段）が「伊勢物語或本」とされ、「不可用伊勢物語ノ或本」とも記される。ちなみにこの「或本」本文に対応するのは小式部内侍本系統（狩使本）当該章段本文であり、「普通」本本文は宮内庁書陵部所蔵「異本業平集」補4・5（「雅平本」になく「三条三位入道本」にあった歌）の本文に対応する。これは、顕昭所持「普通」本が「三条三位入道」（藤原俊成）所持本の本文でもあったことを教える。また、『雅平本業平集』一一～一四が伊勢物語第16段と第102段を併せたものとなっているなどをも勘案するならば、片桐氏成立論の前提への再考をうながす材料ともなろう。

25 注9所引全集・ノート編・第13巻・六段・注25。

26 片桐洋一氏は冷泉時雨亭叢書41所収『伊勢物語下』（朝日新聞社　1998刊）解説で、建仁二年1202奥書本を「定家本確立以前の『伊勢物語』の姿をそのままに保持している」とする（16頁）。たしかに、建仁二年本奥書には「只以旧本可為証拠耳」の文言が見えるのに対して、「戸部尚書」（定家民部卿期1218～1227）の署名をもつ伝本の奥書には「合多本所用捨也。可備証本。」とある。この民部卿期に本文改訂の作業が始まったとすれば、それ以前の「旧本」本文を顕昭『古今集注』が伝えていることになり、時間的にも矛盾しない。また、伝為家本や伝為氏本の本文の存在は、定家の本文改訂以後も改訂以前の本文が流通していたことを教えるが、これは、伝経信『知顕集』の「また男も女もたがひにこゝろゆきてこそとられけめ、それにさしも人のきくほどはなきけることよ。これまた、こゝろへがたし。」に対する回答に「業平にこゝろはあはせたるといはんも、無下にねんもなければ、非道にとられたるやうにせんとて、なくとはいへり。まことになきたるにはあらず。」とあることや、『真名本伊勢物語』が「女心合而」としていること、近世新注真淵『古意』以下にこちらが採用されるなどして生き続けたこと（注31）とも符合する。なお、日本古典全書『竹取物語・伊勢物語』（朝日新聞社　1960刊）解説、「塗籠本の史的意義」項（二一三頁）、参照。

27 橋本不美男・後藤祥子『袖中抄の校本と研究』笠間書院、1985刊。二二九頁。なお、『伊勢物語』本文では亡くなったのを女とするものが多く、『袖中抄』同様「男」とするのは小式部内侍本系統（狩使本）の天理図書館蔵伝為家筆本付載章段及び真名本の数本。今、歌意から『袖中抄』所引本文が妥当と見て引用した（日本古典全書本〈塗籠本〉第7段・頭注8、参照）。

28 本章段は「〝業平韜晦の自己語り〟を聞き伝え語り伝える物語り」たる『伊勢物語』の話題として相応しいものではないが、

『袖中抄』に特段の注記もなく引かれているからには顕昭所持本（「普通本」）に所載のものということになる。その段階ですでに定着した後人増補章段とするのも一解だが、もともと『伊勢物語』がこうした話題をも併せ持つものであったと見ておく。連想、類想から関連話題をも語るのが類聚形態テキストの通例でもあるのだから。なお、本章段が定家本系統で削除されている点は、定家による『伊勢物語』制作の問題を考える材料を提供している。

29 注21にも取り上げた『源氏物語』夕顔巻中、夕顔頓死場面本文「ただこの枕上に夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。昔物語などにこそかかることは聞け、いとめづらかにむくつけけれど」の「昔物語」について、『紫明抄』は「伊勢物語云、おにはやひとくちにくひてけり、あなやといひけれど、神なひさはぎに、えきかざりけり。」と注している（玉上琢彌『紫明抄・河海抄』角川書店　1968刊）。ここから、夕顔物語（ちなみにこれも「ワリナキオモヒ」の物語）の構想に第6段が作用したかとうかがえば、紫式部の目にした『伊勢物語』も、「女（の）こゝろ（を）あわせて」本文を持ったものであったかと推される。また、『大鏡』第一巻「第五十七代陽成院」に見える「伊勢語」の場合も同様であろう。

30 藤井高尚『新釈』には次のようにある。

「女の心あはせて」とは、かみに「女のえあふまじ」とかけるを思ふに、はじめより此男をいとひてにはあらず。ふかきゆゑありて、とてもあひがたければ、つれなくいらへて過ぬれど、年へていふがいとほしくて、今は身をすてゝあひなんと女のこゝろあはせて、かくてはあひがたし、もろともにことかたにゆかんとてしのび出るかまへして、ぬすみいでらるゝをいふ。

ところで、定家はこれを「からうしてぬすみいてゝ」に変えてⅢ型掠奪譚とする。そこにいかなる読書が介在したのかは興味深いが今は措く。Ⅲ型掠奪譚の典型「安積山」伝説が『古今集』序文に見える点は何らかの力として働いたであろう。この他、物語世界の男女関係のあり方をめぐる定家の理念型やイメージも作用しているかも知れない。なお、古注に注26に引いた『知顕集』のごとき問答が見え、新注にも「業平も二条后も罪人になる也」（『童子問』）、「天皇の御妻の密事」（『古意』）などの文言が見える。同様の読書に定家の藤原氏への同族意識が加わって高子の合意を隠蔽させたとの解も可能だが、とらない。

31 『伊勢物語』と上代文学との相関については、日本古典全書『竹取物語・伊勢物語』解説（一八二～一八三頁）のほか、注11河地氏著書（「武蔵野は今日はな焼きそ」、二七四～二七五頁）、注12関根氏著書（「作り物語」第一二段）にも考察が備わる。

32 引用は新編日本古典文学全集『古事記』（小学館　1977刊）による。

33 引用は新編日本古典文学全集『日本書紀2』（小学館1996刊）による。

34 注2日本古典集成『伊勢物語』第77段頭注の解説部分、参照。

（広島大学）